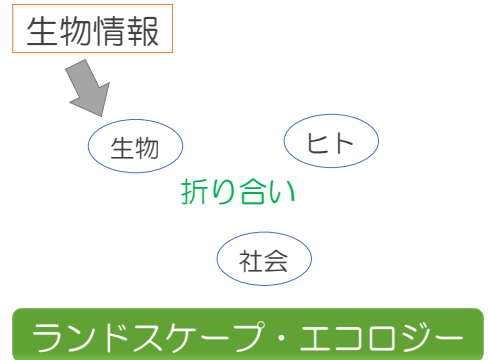


生きものデータを活用する

京都学園大学 丹羽英之

1. はじめに

自然環境の劣化は、くい止められていない。人と自然の“折り合い”を見いだし、将来世代によりよい自然環境を継承していくにはどうすればいいのか？ランドスケープ・エコロジーは、自然環境だけではなく社会も含め、顕在化している問題の解決方法を探求する学問であり、人と自然の“折り合い”デザインを創るための有用な道具となる。



2. 地図をつくる

“折り合い”を検討する上では、様々な情報を時には分析評価を交えながら地図化することが有効である。地図化することでデータを可視化でき、議論のベースとすることができる。様々な切り口でデータを可視化し、議論を受けて試行を繰り返す、そんな時、GISが威力を発揮する。

3. 生きものデータを集める

フィールドで生きものデータを集める際は、どこで？、いつ？、だれが？、どうやって？を記録する。この中で“どこで？”は必要不可欠で最も重要な情報である。“どこで？”を記録する方法としては地図に記入するのが一般的だと思われる。しかし、地図の準備や判読が困難なことがある。GNSS(GPS)を利用すれば“どこで？”を誰でも簡単に記録することができる。

GNSSでは測位精度に差があり、簡易なロガーでは数メートルの誤差が生じ、樹木など電波を阻害するものがあれば精度が低下する。しかし、分析する空間スケールなどによるものの、生きものデータの位置は数メートルの誤差でも十分に使えることが多い。精度を追求することも大事だが、道具は使いようである。また、今後数年で人工衛星の更新によりGNSSの測位精度がさらに向上することが期待できる。

生きものデータの収集手段として重要になってきている市民参加型の調査には、GNSSによる簡単な位置の記録が威力を発揮すると思われる。さらに、フリー・オープンソースのソフト(FOSS4G)を利用すれば、誰でも手軽にデータの整理や分析ができ、“市民参加型の地図化”が可能になる。